

〈実践報告〉 初学者のためのくずし字教材の可能性と課題

——同志社女子中学校・高等学校での出前授業（夏期講習）での実践を中心に——

山 田 和 人

はじめに

新学習指導要領がきっかけとなって、古典教育のあり方について、国語、国文学の学会でもシンポジウムが開催され、多様な議論が行われている。この間の経緯や状況については、井浪真吾「古典教育という営為——国語科教員の立場から——」（『中古文学』一〇七号、二〇二二年五月）が詳しい。これが一時的なものに終わるのか、本質的な議論として継続的に取り組まれていくのか、現時点では、それを見通すことはできそうにない。何が問題になったのかを総括するところまで議論は深まっていない。その議論の答えは、多様な実践の中にしかないのではないか。ひとつではない解を求めて実践の中から問いかけていく以外になさそうである。

筆者の所属する日本近世文学会の動きを振り返ってみると、ひと

つの傾向を指摘できる。近世文学会では、二〇二一年度から「和本リテラシー」（中野三敏『和本のすすめ』（岩波新書）二〇一一年一〇月）の普及に向けて、学会として取り組みを開始した。近世文学及び日本近世文学会により広い社会的認知を目指し、また、社会連携をより効率的・効果的に行うため、広報企画委員会を設置した。委員会として①学会がこの問題にどこまで関わるのかについてのコンセンサス②学会として何が出来たのか、逆に何が出来ないのか③当委員会は何を果たすべきなのかにこたえるべく、勉強会やアンケートを実施し、さまざまなアイデアを出し合った。そのプロセスで、「和本リテラシーに関する実践記録」を集積し、ニューズレターとして関係各所に配布し、学会主催の出前授業を実施することが検討された。そして、和本やくずし字を用いた出前授業を二〇一五年度から学会の取り組みとして実施し、その活動が「和本リテラシ

「ニューズ」(一号～五号)にまとめられた。

出前授業実施のための基盤整備が重ねられ、講師依頼状、講師謝礼、講師の肩書付与など具体的な仕組みづくりが行われ、学会の内規の整備も行われた。さらに和本リテラシー普及活動は、国文学研究資料館「歴史的典籍NW事業」と連携し、古典籍の活用というテーマを共有することになった。その意味で、近世文学会と国文学研究資料館は、研究・教育の両面にわたって提携していくこととなり、和本リテラシー教育は、小中高も含めた古典籍の教育利用の可能性を開くことになった。

「古典は本当に必要なのか」(勝又基編『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信、二〇一九年九月)という問いかけが近世文学会の会員たちから起こってくる必然性はあったのだろう。

本稿で取り上げる出前授業も、こうした和本リテラシー教育の実践であり、それを通して見えてきた出前授業の可能性と課題を探ってみたい。

一 授業実施

今回は、同志社女子中学校・高等学校の協力を得て、二〇一九年七月一七日(水)一〇時五〇分から一二時二〇分まで九〇分の夏期

〈実践報告〉初学者のためのくずし字教材の可能性と課題

講習の時間に「昔の文字を読んでみよう」と題して実施した。対象は、中学三年生WR理系クラス(四二名)だった。クラス担任である大八木宏枝教諭をはじめ、学校長や教務主任など関係教員の協力・支援を頂いたことを断っておきたい。当日までに大八木教諭と授業のねらいや内容についての打ち合わせを行い、具体的な授業の展開と教材サンプルを持参した。その時に、パワーポイントを投影するスクリーンとパソコン、プロジェクターの準備をお願いした。当日のグループ分けは教室の環境もあるので、五～六名程度ということで一任した。

二 授業の流れ

(1) 冒頭、二〇分。自己紹介をして、近年は、和本やくずし字を用いた教育にも力を入れていることを伝えた。まず、いろいろなサイズの和本を見せて、和本について簡単な解説を行った。その後、京都の子どもたちにはなじみの深い地名が出てくる『伊勢参宮名所図会』をグループ毎に回覧して、和本にじかに触れてもらった。

(2) 四五分。くずし字演習。教材プリントを配布して、グループワークの中で課題に取り組んだ。一グループ六名程度。配布した「くずし字一覧表」(後掲)の使い方を説明し、それを使って解説・読解に取り組んでもらった。

(3) 二〇分。理系クラスを意識して、からくり人形の調査と研究の話を聞かせ、愛知県半田市亀崎潮干祭石橋組青龍車（山車）に搭載されているからくり人形「布ざらし」の映像（三分間）を、解説しながら、二回繰り返し見せた。最後に映像を参考にして、竹田からくりの絵画資料である絵尽しから「布ざらし」の挿絵の一部を全員で読み解き、くずし字を読むことができるようになったことを実感してもらった。

最後に五分で振り返り。授業のなかで、研究や学問の楽しさを伝え、中学三年生として進路を考える参考になるように、夏期講習としての授業のまとめを行った。授業後、担任に本時の感想を綴った無記名のコメントシートを送ってもらうように依頼した。

以上のように大きく三つのパートに分けて実施した。

- (1) 和本の知識を実際の和本に触れながら学ぶ（和本体験）
- (2) くずし字教材の解説・読解（くずし字体験）
- (3) からくり人形とくずし字解説の応用（からくり体験）

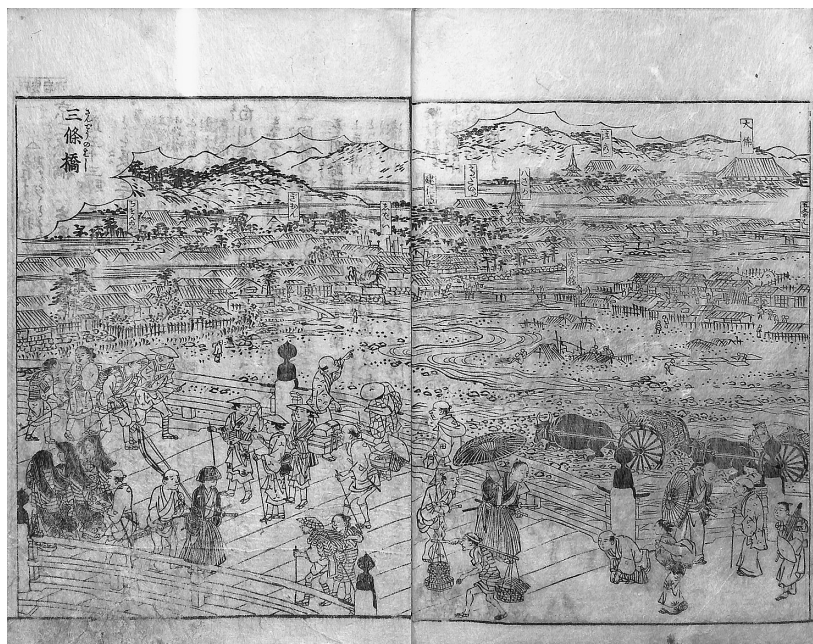
三 実践内容

ここから三つのパートのそれぞれの展開について、詳細をまとめる。

(1) 和本体験

冒頭で、くずし字で書かれた和本を読んでみようという企画であることを伝えた。生徒は、いささかひるんだ様子だった。もちろん、和本に触れたこともくずし字を読んだこともない。彼らにとっては、大学の教員による授業であることもあり、ふだんとは違う雰囲気でも不安もあっただろう。そこで、最初に和本の説明をした。大本、中本、小本の実物を見せながら、本の大きさと特徴、価格などの説明をすると、大きさで内容がおおよそわかったり、値段が変わったりすることも興味深かったようだ。このタイミングで、和本の実物を見てみようということで、『伊勢参宮名所図会』をグループごとに一巻ずつ配布して、実物に触れてもらった。彼らにとっては初めての和本体験である。まだ、くずし字演習もしていないので、詳細を読むことはできない。しかし、見出しの地名や挿絵を見て、何となくわかる、読めるかもしれないと感じたようである。こうしたささやかな自信と期待感は未知の物に触れる時には大切だろう。

『伊勢参宮名所図会』（本編五巻六冊、附録一卷二冊、計八冊）は、寛政九年（一七九七）に板行され、案内書・道中記を代表する作品である。御存じの通り、京都三条から伊勢までの道中記である。京都の生徒たちには、なじみのある地名も出てくるので、グループを越えて、声を掛け合ったり、旅行の情報を交換する生徒もいた。な



〈実践報告〉初学者のためのくずし字教材の可能性と課題

じみのある地名や名所が出てくるのが、案内書・道中記のおもしろさであり、その意味でいわゆる地域教材としてとらえることもできる。地域教材が古典への導入として効果的であることが改めて確認できる。

和本体験の時間の中で痛感するのは、手に取ることができる教材としての古典籍の重要性である。「本」の手触りや本物感、生徒に珍しさとし小さな畏れとときめきを与える。おもしろいことに、研究者が対象とする和本と生徒が求める和本のイメージとは一致しない。極論すれば貴重書と雑本・端本ほどのギャップがある。ここで重要なのは、実際に手に取ることでも実感できるリアリティーであり、雑本・端本の方が、匂いを嗅いだり、次々とページをめくっていたり、自分の感じた通り取り扱うことができる。これが古典籍を身近に感じるという意味では重要なのだ。和本に触れることができれば、古典籍へのハードルを低くしていくことができる。

別の言い方をすれば、貴重書よりも、手に触れことができるような和本の「存在感」が生徒の感性を刺激し、古典籍がいわば古典のイメージ喚起装置のような役割を果たしてくれる。なお、現在、著者が代表を務める同志社大学古典教材開発研究センターでは、こうした和本を貸し出したり、提供できるような和本バンクを開設し、運用体制を検討している。

(2) くずし字体験

初めてくずし字を学ぶ初学者にとって、絵と文字が一体になった教材は実に効果的である。その理由は、くずし字がよくわからなくても、絵を読み解くことを通して、内容を推測できる。もしくは、くずし字を、見当をつけて読んでみることで、絵の意味がわかってくる。そうした絵と文字の相乗効果が自ずと発揮されるのが大きな効果をもたらす理由である。くずし字の基本を学んでから読むか、実例に触れてくずし字を読むか、それはいずれでもよい。

もう一点、付け加えれば、初学者の場合は、どちらかといえば短い分量のくずし字の方が、心理的なハードルを下げるができる。もう少し突っ込んだ言い方をすれば、直観的に把握することができ程度の長さが適当であり、くずし字で表現されている内容を一目で把握できる方が集中できるのだろう。

さらに、百人一首などのように、自分自身がすでに学習したり、見聞したりして知っている知識や情報を活用して、くずし字で書かれた作品の内容が理解できるような教材であれば、なおいつそう効果的である。

こうした条件を備えたくずし字教材を準備できれば、初学者にも和本やくずし字が身近に感じられ、いろいろ想像して解いて楽しむことができるようになる。

今回の授業では、『とんさく新じ口』を取り上げた。本書は、いわゆる頼知集であり、クイズ集のような性格が備わっている。頼知を効かせたことばの洒落（地口）が文字通り多く取り上げられており、出典や典故となる表現の一部を変えただけで、世界が変わるところが最も興味深い教材である。しかも、滑稽みのあるクイズに答えていくように展開することで、学習者の能動性を引き出すことができる。

本書は、大東急記念文庫所蔵の一書であり、すでに『近世子どもの絵本集 江戸篇』（岩波書店、一九八五年七月、三三八～三四三ページ）に翻刻・掲載されている。教材としてはこちらに所収されている挿絵を使用した。全五丁であり、各半丁に四コマが配置されている。合計、四〇点の挿絵が掲載され、挿絵にはすべてに地口が書き込まれている。脚注も詳細で、教材解説にも活用できる。刊年については、江戸中期かと推定されるが、詳細は不明である。それらのうちから初学者が興味・関心を持つと想定した挿絵を二〇点選んで、難易度も考慮しながらA4一枚に配列し、表面に挿絵、裏面に翻刻と解説を付した。ここではすべてを取り上げることではできないので、授業で使用した数例をあげて、それぞれの教材をどのように使用したのか、報告したい。

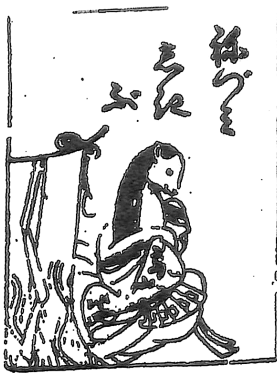
くずし字の読解のための「くずし字一覧表」を配布した。その際、

ひらがなには複数の字母があることに絞って説明する。具体的な使用法は、後に触れるので、読めずに困ったときには、この一覧表を見てみようという意識づけを行う。煩雑な説明はしない、ここが指導のポイントだ。

なお、グループで話し合い、知恵を出し合って、くずし字を読み解くように指示している。独力で読むよりも、メンバーといっしょに読み解いていく方が、読むことができた時の達成感も倍増するからである。

A 「ねずみしきぶ」

くずし字について話をする機会に、必ず最初に取り上げるのが、「ねずみしきぶ」である。ここでくずし字を読み取る上で必要な基本を伝えるようにしている。実践的に学習していくことが、初めて和本やくずし字に触れる初学者には効果的である。留意点とともに使用方法について記す。



使用方法について記す。

a まず、王朝の御帳台風の調度の前に座る平安貴族の女性の顔に注目させる。その顔が人間ではないことに気づかせる。これは何かと問いかける

と、「私たち」「ねずみ」「きつね」などが生徒の中から出てくる。そこで、くずし字一覧表のなかに近い字母を持つ文字がないか問いかける。「み」が「三」のくずし字であることは直観的にわかっているのので、三択のなかからそれが含まれている物を探せば、「ねずみ」と特定できる。

b あとの「しきぶ」についても同様に絵に注目させ、平安時代の女流作家というヒントを与えると、すぐに数名から紫式部の名前が出てくる。そのつもりでくずし字一覧と対比してみると「しきぶ」の「し」が「志」のくずしであることに気づくと、二文字目も今とは違う字母の「起」と気づく。そこで、ほぼ全員が「しきぶ」と気づく。つなげてみると、「ねずみしきぶ」と解説できたことになる。

c 次に解読した文字の意味するところを考えてもらう。その時に、「ねずみしきぶ」から連想される平安時代の女流歌人としては誰がいるかと問いかける。紫式部だと、「むらさき」で四文字になるので、これは不適當であることがわかる。さて、他にはどんな歌人を知っているかと問いかける。なかには鋭い生徒が必ずおり、「いづみしきぶ」の名前があがってくるが多い。今までの古典学習の成果である。

そこで「ねずみしきぶ」と「いづみしきぶ」の文字を比べて見る



と、たった一字、「ね」を「い」に変えただけであることに気づく。一字違いで大違い、美女と賞された女流作家和泉式部の顔を鼠に変えるだけで、鼠式部という滑稽な人物に変わってしまう。ここ

問うと、理由はわからないが、亀を釣っていると答える。そこで、くずし字「覧表」を使って、「かめ」の字母を確認させる。「め」は現在のひらかなと同じなので、「か」が問題になる。絵の亀と重ねて「可」が字母であることに気付く。さらに、亀を釣っていることから、「つ」が「徒」のくずし字であることも容易に気づく。問題は「まつだけ」である。

が頓知であり、洒落であることを説明すると、生徒はなるほどと納得する。解読した文字を読解していくことの面白さを通して、くずし字を解読することと読解していくことが、ひとつのものとしてあることに、彼ら自身が実践を通して気づいていく。そのプロセスで、くずし字にも興味や関心を持つようになる。

B 「つるかめまつだけ」

次に必ず使用するのが「つるかめまつだけ」である。絵を読み解きながら、字を読み解くという方法とくずし字「覧表」の使い方がわかったことを活かして、次に絵を読み解くおもしろさを経験し、字を読む楽しさを実感させるための事例である。

a 最初に、この絵に描かれた人物が何をしているかを尋ねると、釣りという答えがすぐに返ってくる。そこで何を釣っているのかを

b 再度絵に注目させて、釣り人がどこに座っているかと問うと、グループの中で何人かが、はたと気づく。観察力の鋭い学習者は、それが川辺の岩ではないことに気づく。じっくり俯瞰的な視点で全体を見直すと、それがきのこの傘であることに気付く。文字通り、きのこの代表格である松茸の上に座っていることを発見し、そこに書かれているくずし字を「まつだけ」（松茸）と解読することができる。ここでは、文字としては、「た」が「多」を字母とすることに気づくことがポイントであり、くずし字「覧表」を検索しながら、頻出する字母であることを指摘して注意喚起をする。このように、視点を変えて絵を解読・読解してみる楽しさ、それを発見するおもしろさを実感しつつ、くずし字を覚えていくことになる。まさに釣り人が、亀が釣れるのを待つばかりであるという文意を読み取ることができ。

c ここで深読みをすればということで、「つる」を鶴、「かめ」

を亀、「まつ」を松、「だけ」を竹と読めば、おめでた尽くしになっていると、解釈の多様性を指摘することで、解読と読解の重層するおもしろさを伝えることができるだろう。ここでは、興味を持った学習者に向けて、研究や学問は、「見えないものを見ることではなく、見えていないものを見えるようにする」ことであり、それが解読・読解する楽しさでもあることなど、雰囲気を見ながら説明する。それほど興味を示さない場合はさりとて済ませる。

C 「やんま大わう」

a 絵に注目させると、その姿形から閻魔大王と答える生徒がかなり多い。その時はなぜかと思ったので、後で、Googleで検索してみると、「鬼灯の冷徹」などのコミックやアニメがヒットしていることがわかる。一時期、仏像や刀剣のブームがあったが、地獄の



キャラクターもそうした流れと同様に、いやかえ

って身近に思えるのだらう。その意味では、このコスチュームもなじみのあるものだった。

ところが、絵に記されているくずし字は「えん

ま」とは読めない。案外、コミックやアニメは漢字で記されているので、閻魔大王という漢字表記は知っている。だが、それにしても一字目は「え」とは読めない。「え」もしくは「ゑ」をくずし字一覧表で検索しても、そうした字母は見あたらない。

b 再度絵に注目させると、閻魔大王の冠の上にトンボが止まっていることに気づく。そうすると生徒のなかから、「やんま」や、という声があがる。トンボのなかでも比較的大きなトンボを「やんま」というが、代表格はオニヤンマだ。昔の子どもたちが捕まえて遊んでいたのはこれである。生徒たちがこうした知識や情報を知っていることに驚かされた。これにも漫画やアニメが関係しているのか、あるいは生物に興味がある理系志向の生徒だからか、そこまでは授業中に確認できなかった。「え」ではなく、「や」で検索してみると、「屋」が字母であることがわかる。これで「やんま大わう」と読解できた。

c 「えんま大わう」の「え」を「や」に一字置き換えるだけで、怖い地獄の閻魔様の冠にオニヤンマがとまっているという滑稽さが作者のねらいであるという読解へとつながっていくことができる。ちなみに「大わう」の解読は、閻魔大王から連想できるので、「だいおう」と読みたい。問題は、「わう」で王と読めるかだ。ここで古典の学習成果が活きる。そして、「わ」の字母は何かを考えながら、



「おう」と発音できる字を探す。最も近い字母が「王」であることに少し時間がかかるが気づく。

これでじゅうぶんである。

別の見方をすれば、生き物を素材にした教材は学習者にとっては親しみ

やすいようだ。教材選びでは、留意しておきたい。

D 「人目のすかた しはしと、めん」

次に学習者自身の知識や情報を活用して、くずし字を読解していくのに最適な「人目のすかた しはしと、めん」を紹介したい。本題に入る前に、古典籍の中で用いられる疊字（踊り字）「ゝ」について、ひらがなは「ゝ」、カタカナは「ゝ」、「く」が複数文字の繰り返しとして使用されることを伝えておくのも初学者への配慮である。

a ここでも、まず絵に注目させる。僧侶がじつと見つめているのが、軒から下がっている四角の板であり、それが何なのか、考えさせる。ヒントになるのは、そこに目がふたつ描かれており、中央に文字が書かれていることである。一字目が「め」であることは現

在のかなと同じなのでわかる。次が「く」、最後が「り」と読むことができれば、つなげると、「めく□り」となり、その間には何が入るのかを問うと、目に関連するもので、目葉の意味ではないかと連想が働く。この四角の板は、目葉屋の看板であることがわかる。僧侶は、目葉屋の看板のふたつの目をじつと見つめていたことになる。そこで、「す」の字母をくずし字一覧表で確認させると、字母が「春」であり、「す」の読みが確定する。

どちらが先でもいいのだが、本文前半の「人目の」は漢字が含まれていることを言うと、ほぼ読むことができる。次の「す」は、「めくすり」の「す」と同じであり、「か」と「た」は既出であることを伝ええると、すぐにつなげて、「人目のすかた」と読解できる。

b 後半の「しばし」の最初の「し」は既出で、「しきぶ」の「し」と同じであることでわかる。「ば」が読解しづらい。最後の「し」が絵なのか字なのかが判別しにくいので「し」であることを説明しておくようにしている。「ば」が読みづらい場合は、□のままにしておく。「し□し」のままにして次に進む。ここでくずし字は、不明な場合は文脈で理解できる場合もあるので、□のままに読み進めるのも読解のコツである。初学者はそこで止まって、先へ進めなくなってしまうことが多いからである。最後の「と、めん」は疊字の説明をしてあるので、あとは、現代のひらがなと同じように

読むことができるので、「と、めん」と容易に察しがつく。

先に「人目のすかた しばしと、めん」という方から入って、看板の文字にいくのでもよい。どちらでもやりやすい方を選択すればよいことも伝えるとよい。

「人目のすかた」「し□し」とどめん」と読み上げたところで、百人一首の中の、何か知っている歌を連想しないかと問いかけるとよい。何人かの生徒たちからこの歌そのもの、もしくは「部が口をついて出てきた。実は、生徒が百人一首を習っていることはすでに情報収集済みだった。「あまつかぜ雲のかよひち吹きとぢよ 乙女のすがたしばしとどめむ」の下の句を踏まえていることがわかる。先程の「し□し」が「しばし」と推定されるので、くずし字一覧表を検索すると字母が「者」であることを突きとめることができる。こ



れで「人目のすかた しばしと、めん」と解説できた。

c 改めて絵とともに読み直してみると、「をとめの姿しばしとどめむ」の「を」を「ひ」に置き換えただけで、恋の

歌が、目薬屋の看板に描かれた人の目をじっと見つめる僧侶の姿へと展開している滑稽さに変換されているという読解に至る。

先程の歌の作者は誰かと問うと、百人一首を習って覚えているぐらいの生徒は、僧正遍昭であることを知っている。授業で習っているからと言って、全員が百人一首をしつかり頭に入れていることを期待してはならない。ただ、この挿絵のおもしろさを理解するためには、元の歌を知っている方がよいことを説明し、この歌の作者が僧正遍昭であることを、作者は計算づくでこの場面を作っていることに気づかせる。このように趣向を張り巡らせる作者の作意を推理するおもしろさに理解が及ぶことになる。僧正遍昭がたまたま出会った目薬屋の看板に描かれた人の目をしばし眺めているという意味であり、恋の歌が目薬屋の看板に目をとめる日常的な街中の風景を詠んだ歌に転換するおもしろさを読み取ることができる。

E 「のみ人しらずとはかれたり」

古典の知識を持っている学習者には、そのおもしろさがうまく伝わる「のみ人しらずとはかれたり」を最後の一例に取り上げたい。

a 絵に注目させることから始める。障子に大きな葉がかかっており、男の手元には、同じく大きな葉が重ねられている。よく見ると、男は右手に持った刷毛で葉っぱの塵を掃いている様子が見える。その右には何やらまな板のような道具が置かれている。実は、この

男は煙草の刻み職人で、刻む前に葉っぱについている塵を落としているところである。というのも、煙草の葉を干すために縄の間に葉の茎を挟むので、葉に葉がくっつくのでそれを吐き落とす必要があった。

b ここで用いられているくずし字はほとんどが既出なので、今回のくずし字学習について学習者自身の振り返りにもなる。煙草の刻み職人が、「自分自身が刻んでいる煙草をいつたい誰が吸うのだろうか」と思いを巡らしながら煙草の葉を刻んでいるということになる。当時、煙草の刻み作業を請け負う職人もおり、賃粉切りとも呼ばれた。ここに描かれた職人もそうではないか。煙草は「吸う」が一般的だが、「飲む」とも言ったこと、さらに煙草の葉の栽培や取り入れ、刻みの話などを交えると、生徒は興味を持って聴いてくれる。

c これで終わってはおもしろくない。実は、「のみひとしらず」という音から何か連想しないかと尋ねてみる。ヒントは、作者のわからない歌があるときに、作者未詳ということは何と言ったかと尋ねると、和歌や百人一首を学んでいる場合は、その知識から「詠み人知らず」という言葉が出てくる。そこで「詠み人知らずと書かれたり」とすると、それをもじって「のみ人しらずとはかれたり」（飲み人知らずと掃かれたり）と「よ」を「の」に、「か」を「は」

に変えることで、作者未詳の用語から煙草の刻み職人の感慨へと大きく変化していることがわかる。ここでは、二文字を置き換えることで、まったく別の世界へと遷移しているおもしろさが実感できる。今までの一文字変換から二文字変換へとレベルアップしている。

くずし字の教材で重要なのは学習者が自分自身の知識や情報を活かして作品の意図を読解するおもしろさを実感させることだ。ここでも解説から読解へ、判読から解釈へと進めることができる。一見気づかないような小さな発見が次々とたらされるおもしろさがポイントだ。この教材のおもしろさを引き出すために、ここは畳みかけるようにヒントを出して、テンポよく進めるのが望ましい。

なお、ここで紹介している教材はそれぞれ独立しており、最初のA、Bは、くずし字の基本を説明するのに使用して、C以降は順番は関係なしに必要なに応じて適宜使って頂きたい。

四 生徒の感想

授業終了後、回収された感想の一部を紹介する（無記名）。生徒がどのように出前授業を受け止めたのか、生の声を届けたい。全体としては、くずし字や和本、からくりに興味・関心を持ってもらえた。すべてを紹介する紙面のゆとりはないので、その中からいくつかの文章を紹介する（全文）。

a 夏期講習の時間割を見た時、「昔の文字で読んでみよう」という題が目にとまり、講義を聴くのを楽しみにしていました。

普段、テレビなどで見る和本を実際に触ったのは初めてでした。思っていたよりも、柔らかくて軽かったので驚きました。

江戸時代に親しまれていたネタを読み解く時間がとても楽しかったです。くずし字の表を見ながら文字を読み、そこに隠されているメッセージを考えると、いつの間にか夢中になっていました。どうしてもわからなかったときに答えを聞くと、すぐに納得できたので、江戸時代の人々はすごいなあと思います。

また、竹田からくりの「布ざらし」の映像で、人形があらゆる方法で布を回しているのを見て、とても面白いと思いました。機会があれば生で見たいです。映像では、「布ざらし」だけでしたが、その前に花笠を使って踊ることも知って（筆者注：絵尽しの絵の読解）、ますます竹田からくりに興味が湧きました。

この授業を通して、今まで知らなかったことをまなび、日本の文化について新たな関心をもつことができました。

b 昔の言葉を読解するのがすごく楽しかったです。読解できたときの達成感がやみつきになるぐらいおもしろかったです。また、その文章の意味や、それに関わることを教えて頂き、とても興味深かったです。

〈実践報告〉初学者のためのくずし字教材の可能性と課題

それに加えて、からくり人形の動画を初めて見て、最初は本当の人かと思うぐらい自然な動きをしていて驚きました。大きさも自分か思っていた以上に大きいということを知りびっくりしました。

この授業をして頂き、古典が少し身近に感じ、さらに色々知りたいと思いました。

c 今回の授業を受けるまで昔の文字は難しそうだし、自分には到底読めないだろうと思っていました。しかし、実際に友達と協力して読んでみると暗号を解いていくみたいでとても楽しかったです。百人一首や人名などおもしろおかしく書いてあって、当時の子供達が楽しく学べるように作られたものかなと思いました。私達はいまスマホなどに夢中になっていますが、今回さまざまな昔の文字や伝統ある芸能に触れていろいろと考えさせられました。AIなどいろいろな技術が発達して未来に関心が高まっていますが、少しさかのぼって過去に目を向けてみるのかもしれないのだなと気づきました。

d 授業がとても楽しくて、初めて江戸時代の文字を読むという貴重な経験ができてとても良い機会になりました。江戸時代の人も今の人とかわらないユーモアがあつて面白いなと思いました。同じようにみ方でもちがう字があることが面白く感じました。残りの問題も楽しく家で解きました。楽しい授業をありがとうございました！

e 私はどちらかというと理系が得意なので、文系の教科（特に国語、社会）にはあまりくわしい話を聞くこともなく、知ることもなくという感じでした。ですが、今回の授業はわざわざ同大から先生がいらっしゃると聞き、楽しみにしていました。そして授業は思っていたものよりも、ずっと面白く楽しくて、そしてなにより先生のお話がとても興味深かったです。国語の古い文はとても苦手分野なのですが、そんな私でも聞き入ってしまいました。今回はすてきな授業を受けるという貴重な経験をありがとうございました。

f 実際に和本を触ったり、昔の言葉を解説したりするのは初めてでしたので、とても楽しく、久しぶりに好奇心がくすぐられた気がしました。私はWRコースに在籍していますが、文系に進むか理系に進むかをまだ決めていないので、進路を考える良い参考にもなりました。

おわりに

古典籍には、本来、教材性が内在している。それをいかに活かすのか、具体的な実践事例の中で探っていくことが重要だ。今回の出前授業を通して浮かび上がってきたくずし字教材、授業の可能性と課題についてまとめておきたい。

1 アクティブラーニングに最適

今回のくずし字教材は素材が頗知集で、学習者との一問一答式の対話型素材であり、課題発見型の授業展開とあわせて、グループで意見交換しながら、議論を通して課題を解決していくALに向いている。全員がくずし字は初体験なので、解説においては同じスタートラインに立っていること、各自の知識や情報を共有して、チームで取り組んでいくことで、課題を解決した達成感が大きい。

2 解説Ⅱ読解という重層性

くずし字教材の素材がすでに対話型であることで、授業展開が双方向型になるために、グループで智慧を結集して課題に取り組むことになる。この教材は絵と文字をいかに言語化していくかという読解のレイヤーと、いかに解釈していくべきかという読解のレイヤーが重層しているので、学習者は意見を出しやすい。各自の意見の根拠を挙げて、絵や文字に隠されたコードを読み解いていくスリルとときめきを感じることができる。

3 体験型学習の有効性

和本体験、くずし字体験、からくり体験を組み合わせた授業展開にした理由は、学習者に「未知」と向き合う好奇心を引き出したい、そこから興味・関心を喚起したいと考えたからである。ふだん目にしない教材を導入する時には、こうした体験学習が効果的であり、

実物の持つリアリティーは初学者はインパクトが強く、和本やくずし字、からくりなどに触れることで、昔の人と同じ感覚を共有できるという臨場感は何にも増して説得力がある。

4 出前授業の貢献

出前授業は一回限りであり、通常授業のような持続性は求めようもない。それ故、出前授業を実施しようとする学校側のニーズをできるだけ的確に把握するために、事前の打ち合わせが必要だ。今回は中学三年生の夏期講習であり、生徒たちが進路選択の参考になるようにしたいという学校側の意図に叶うように努力した。理系志望のクラスなので、「からくり」人形の要素を取り入れたのも学習者への配慮だった。もちろん、既習教材の確認は必須である。

5 生涯学習につなぐ

今回の教材を自宅で家族とともに解いてみたというコメントがあった。すでにくずし字教材が家庭学習、生涯学習への道を切り拓いていることを示しており、この視点は重視したい。

こうしたくずし字教材を使った出前授業などは、新学習指導要領の「伝統的な言語文化」にも対応しており、複数教科の合同授業や今回のような講習など、授業や学校行事とも連携して実践していくことができるだろう。こうした授業が実施できる背景には、くずし字学習を支援するアプリやサービスが整ってきたことも大きい。今

〈実践報告〉 初学者のためのくずし字教材の可能性と課題

後のICT活用が進んでいく中で、これらが学習支援ツールとして一般化していくことが予想される。くずし字学習支援アプリKEU-AやA-Iくずし字認識アプリ「みを」などが、スマホで手軽にダウンロードできる。人文学オープンデータ共同利用センターのくずし字アプリ・サービス（検索／認識／解析／解説）で一覧でき、リンクから閲覧できる。<http://codh.rois.ac.jp/char-shape/app/> 本稿の内容については、『和本リテラシーニューズ』（日本近世文学会）第五号に「くずし字教材の開発と実践」として簡単な内容紹介を行っていることを断っておきたい。ここでは、限られた紙面であつたために詳細を紹介できなかったために、改めて本稿で取り上げることにした。

<http://www.kinseibungakukai.com/doc/wabonichiran.html>

今回使用した教材は次のURLとパスワードからダウンロードできます。PW:kuzushiji 公開期限は二〇一三年三月二〇日です。

https://webdisk.doshisha.ac.jp/public/pK5kAAEMUMIAxfoB5sx9GKELED6Y12KxYjwXhT_WO

八〇

中野三敏『くずし字で「百人一首」を楽しむ』2010年11月、角川学芸出版